

## 解答

一

問一 玲那さんには、もともと見えにくいという症状があったので、視覚に対する依存度が低かったということ。また、家の中という安定した空間にいたので、細かく観察する必要がなかったということ。

問二 見えていたものがある瞬間に突然見えなくなるという意味。

問三 話しながらずっと手元の紙にメモをとる、まるで見えているかのようになめらかな玲那さんの手の動き。

問四 障害を得れば全身の働き方が変わるものなのに、玲那さんは視覚を失っても、記憶として持っている目の見える体が働き、書く能力がほとんど劣化していないところ。

問五 何らかの物を操作し、その結果を視覚的にフィードバックするという身体的な活動が、自分の脳だけではできないような複雑な思考を容易にする。

問六 玲那さんの「書く」という行為は、視覚的な経験をもとに作られたイメージを手がかりにして、目が見える人と同様に、周囲の空間とのかかわりの中で、思考の補助的手段として行われているということ。

二

- ① 余波                      ② 穀類                      ③ 負〔えない〕                      ④ 創設  
⑤ 功績                      ⑥ 展覧会                      ⑦ 奮〔って〕                      ⑧ ようさん